

白金之繪圖

鏡 花



第一

も薄暗い森續きに、畝々く遙々と黒い柵を繞らした火薬庫の裏通、寂い處を、とぼくと一人通る。

片側は空も曇つて、今にも一村雨來さうに見える、日中

「はあ、此なればこそ可けれ、聞くも可恐れげな煙硝庫が、カラくとして燥いで、日が當つては大事ぢや。」

と世に疎さうな獨言

大分日焼けのした顔色。で帽子を被らず、手拭を疊んで頭に載せ、半開きの白扇を額に翳した：一方雑樹交りに干潟のやうな廣々とした畑がある、瓜は作らぬが近まはりに番小屋も見えず、稻が無ければ山田守も僧都もちはさぬ。

雲から投出したやうな遺放しの空地に、西へ廻つた日の赤々と射す中に、大根の葉の彼方此方に青々と伸びたを視めて、

「扱て世はめでたい、豊年の秋ぢや、つまみ菜もこれ太根に成つたよ。」

と、一つ腰を伸して、杖がはりの縷子張の蝙蝠傘の柄に。何の禁厭やら烏瓜の眞赤な實、藍、蒴黄とも五つばかり、蔓ながらぶらりと提げて、コッソと支ゐて、面長で、人柄な、頤の細いのが、鼻の下を尙ほ伸ばして、もう一息、兀の頂邊で扇子を翳して、

「いや、見失うては成らぬぞ、あの、緑青色した鳶が目當ぢや。」

で、白尼袋に穿込むだ日和下駄、コト／＼と歩行さ出す。

年齢六十に餘る、鼠と黒の萬筋の袷に黒の三ツ紋の羽織、折目はきちんと正しいが、色のやゝ褪せたを着、焦茶の織もの、帯を胸ぶくれに、懐大きく、腰下りに締めた、顔は瘠せた、が、目じこの落ちない、鼻筋の通つたお爺さん。

眼鏡はありませんか。碌青色の鳶だと言ふ。それは聖心女子院とか稱うる女學校の屋根に立つた避雷針の矢の根である。

最も鳥居敷は潜つても、世智に長けては居さうになし。

此處に廻つて來る途中、三光坂を上つた處で、憊う云つて路を尋ねた…

「卒爾ながら、些ともものを、些ともものを。」

問はれたのは、ふらんねるの茶色なのに、白縮緬の兵子帯を占めた髻の有る人だから、事が手軽に行かない。——但し大な海軍帽を仰向けに被せた二才ぐらゐの男の兒を載せた乳母車を曳いて、其の坂路を横押に押してニタ／＼と笑ひながら歩行いて居たから、親子の情愛は御存知であらうけれども、他人に路を

聞かれて喜んで教へるやうな江戸兒ではない。

黙然で、眉と髻と、面中の威厳を緊張せしめる。

老人もう一倍腰を屈めて、

「えい、此の邊に聖人と申す學校がござりまする筈で。」

「知らん。」と、苦い顔で極附けるやうに云つた。

「はッ、此は御無禮至極な儀を、實に御歩を留めました。」

ぐわたくと下りかゝる大八車を、ひよいと避けて、挨拶に外した手拭も被らず、其のまゝ、とぼんと

行く。頭の法體に對しても、餘り冷淡だつたのが氣の毒に成つたのか。

「あゝ、聖心女學校ではないのかい。それなら有ッぢやね。」

「や、女子の學校？」

「然うですッ。そして聖人ではない、聖心、心ですが。」

「いかさま。然うもござりませう。實は先達で通掛りに見ました、聖、何とやらある故に、聖人と覺えま

した。いや、老人疎忽千萬。」

と照れたやうに其の頭をひたり……と云つた爺様なのである。……

第二

其の女學校の門を通過した處に、以前は草鞋でも振ら下げて賣つたらう、蘆簀張ながら二坪ばかり圍を

取つた茶店が一張。片側に立樹の茂つた空地の森を風清にして、如法の婆さんが煮ばなを商ふ。これは無くては成るまい。あの、火薬庫を前途にして目黒へ通ふ赤い道は、憊る秋の日も見ると暑くなるしく、並木の松が欲しさうであるから。

老人は通りがかりに此を見ると、きちんと疊んだ手拭で、額の汗を拭きながら端の方の床几に掛けた。「御免なさいよ。」

「はい、結構なお日和でございます。」

「然れば……ちやが、歩行くには些と陽氣過ぎますの。」

と今時、珍らしいまで躰の可い扇子を抜く。

「否、御隠居様、憊うして日陰に居りましても汗が出ますでございますよ。何ぞ、シトロンかサイダでも

めしあがりますか。」と商賣は馴れたもの。

「いや、老人の冷水とやら申す、馴れた口です、お茶を下され。」

「はさく。」

些と横巾の廣い、元氣らしい婆さん、とぼけた手拭、片襷で、古ぼけた塗盆へ、ぐいと一つ形容の拭巾をくれた、

「あや、坊ちゃん、お嬢様。」と言ふ。

十二の編ざげで、袖の長いのが、後について、七八ツのが森の下へ、兎と色鳥ひらりと入つた。蘆簀越に、老人は此を透かして、

「あゝ、其の森の中は通抜けが出来ますかの。」

「此は、餘所のお邸様の持地でございますして、はい。否、小兒衆は木の實を拾ひに入りますのでございませよ。」

「出口に迷ひはしませんかの、見受けた處、なか／＼何うも、奥が深い。」

「最う口元だけでございます。で、ございませうから、榎の實に團栗ぐらゐ拾ひますので、つゝと中へ入りますれば、栗も椎もございませうが、よくいたしたもので、其處までは、可憐がつて、お幼いのは、おいたが出来ないのでございます。」

「はゝあ如何にも。」

と、飲んだ茶と一所に、したゝかに感心して、

「これぞ、自然なる要害、樹の根の亂坑、枝葉の逆茂木とある……廣大な空地ぢやな。」

「隠居さん、一つお買ひなすつちや何うです。」

と唐突に云つた、土方體の半纏着が一人、床几は奥にも空いたのに、婆さんの居る腰掛を小楯に蹲んで梨の皮を剥いて居たのが、ぺろりと、白い横啣えに聲を掛ける。

眞顔に、熱と肩を細く、膝頭に手を置いて、

「滅相もない事を。老人若い時に覺えがあります。今とてもぢや、足腰が丈夫ならば、飛脚なと致して通つて見たい。あゝ、それも成らず……」

と思入つたらしく歎息したので、成程、服装とても秋日和の遊びと見えぬ、此の老人の用ありさうなも

身過ぎのため、と見て取ると、半纏着は打て、消氣た顔をして、剝いて落した梨の皮をくるくると指に巻いて、つまらなく笑ひながら、

「は、野原か、山路のやうな事を言つてなさらあ、は、は、は。」

「いや、まるで方角の知れぬ奥山へでも入つたやうぢや。晝日中提灯でも松明でも點けたらばと思ふ氣がします。」

がつくりと俯向いて、

「頭ばかりは光れども……」

つるりと無てた手、頸の窪。

「足許は暗ぢやが、のう。」と情れた肩して膝ばかり、さちんと正しい扇を笏。

唯、思はず釣込まれたやうに成つて、二人とも何か其處へ落ちたやうに、さよろくと土間を胸す、蘆簣の屋根に二葉、三葉。森の影は床几に迫つて、雲の白い蒼空から、木の實が降つて來さうであつた。

第三

半纏着は、急に日が陰つたやうな足許から、目を上げて、兀げた老人の頭と、手に持つた梨の實の白いを見較べる。

婆さんが、口を出して、

「御隠居様は御遠方で居らつしやるのでございますか。」

「下谷ぢや。」

「其奴あ遠いや、電車でも御大抵ぢや無え、へい、そして何方へお越しに成るんで。」

「聊か此の邊へ用事があつての。一向に當年唯た一度極暑の砌參つたばかり、一向に覺束ない。其節通りがりに見ました、大な學校を當にいたした處、唯今立寄つて見れば門が違うた。」

腕を伸ばして、來た方を指すと共に、齊く扇子を膝に支いて身體ごと向直る……それにさへ一息して、

「それは表門でござつた……坂も廣い。私が覺えたは、もそつと道が狭うて、急な上り坂の中途の處、煉瓦塀が火のやうに赤う見えた。片側は一面な野の草で、蒸れの可恐い處でありましたよ。」

「それは裏門でございますよ。道理こそ、此の森を抜けられまいか、とお尋ねなされた、お目當は違ひませぬ。森の中から背面の大畠が抜けられますと道は近うございますけれども、空地でもそれが出来ませんので、此から、づゝと煙硝庫の黒塀について、上つたり、下つたり、大廻りをなさらなければ成りませぬ。何でございますか、女學校に御用事ではございせんか。それだと表門でも用は足りませうでござりますよ。」と、婆さんは一度掛けた腰掛を又立つて、森を覗いたり、通を視たり。

「いや、其處を見當に、別に尋ねます處があります。」

「丁と分つて居るんですかい、あいでなさる先方つてのは。から寂しくつて疎在でね、家の分りにくい處ですぜ。」と、煙草盆は有るものを、口元で燐寸を潑、と目を細うして仰向いて、半分消して置いた煙草をつける。

「餘り確かでも無いので。又家は分るにしてもぢや。」

と扇子を倒すのと、片膝力なく叩くのと、打倒くのが殆ど一所で、

「仔細なく當方の願が届くか何うかの、さて、」

と沈む……近頃見附けた縁類へ、無心合力にでも行きさうに聞こえて、

「何せい、煙硝庫と聞いたばかりでも、清水が湧くやうでは無い。些と更まつては出たれども、又一つ山を越すのぢや、御免を赦る。一度羽織は脱いで參らう。あゝ、いやお婆さん、それには及ばぬ。」

紋附の羽織を脱いだのを、本疊みに、スーツスーツと襟を伸して、ひらりと焦茶の紐を捌いて、纏れたやうに手を控え、

「扮装ばかり凜々しいが、足許は矢張り暗夜ぢやの。」と裾も暗いやうに、又陰氣。

半纏着は腕組して、

「眞個、足許が悪いですかい、負つて行く事も成らねえしと……隠居さん、提灯でも上げてえやうだ。」

「夜だと眞個にお貸し申すんだがねえ。」

「何うですえ、其の森の中の暗い枝に。烏瓜ツて奴が黠もつて居まさ。眞紅なのは提灯見たいだ、ねえ、持つておいでなさらねえか、何かの禁壓に成らうも知れませんや。」

「はあ、烏瓜の提灯か。」

目を瞑つて、

「それも一段の趣ぢやが、また持つて出たと云ふ験を聞かぬ。」と羽織を脱いで尙ほ瘦せた二の腕を扇子で擦る。

第 四

「凍傷の薬を賣つてお歩行きなさはしまし、人。」

と婆さんは、老ひたる客の真面目なのを氣の毒らしく、半纏着の脊中を立身で壓へて、

可加減な、前例にも禁壓にも、烏瓜の提灯だなんぞと云つて、狐が點すやうぢやないかね。」

「狐が點す……何。」

と顔を蔽ふた黻を拂つて、雲の晴れた目を睜る、と水を切つた光が添つた。

「何、狐が點すか。面白い。」

扇子を颯と胸に開くと、懷中を廣く身を正して、

「どれ、何處に……あゝ、あの葉がくれに點れて紅いわ。お職人、いゝ事を云つて下さつた。どれ一つぶ

ら下げて參るとします。」

「あゝ、隠居さん、氣に入つたら私が引ちぎつて持つて來ら。……串戯にや言つたからつて、お年寄のた

めに働くんた。先祖代々、これにばかりは叱言を言ふめえ、どつこい。」と立つ。

老人は肩を揉んで、頭を下げ、

「此は何ともお手を頂く。」

「何の、隠居さん、なあ、あつかあ、今日は父親の命日よ。」

と、蘆簀を出る、と入違ひに境界の柵の弛んだ網線を跨ぐ時、莨を勢よく、ボンと投げて、裏つきの

被足袋、づしと、草を踏むだ。

紅い其の實は高かつた。

音が、かさくと此方に響いて、樹を抱いた半纏は、梨子を食べた獸の如く、向願巻て葉を分ける。

「氣を着けうぞ、少い人、落ちまい……」と伸上る。

「大丈夫でございませすよ。電信柱の突尖へ腰を掛ける人でございませすからね。」

「むい、俵勇ぢやな……杖とも柱とも思ふぞ、老人、其の狐の提灯で道を照らす……」

「可厭ではございませんかね、此の眞晝間。」

「其處が縁起ぢや。禁壓とも言ふのぢやよ。金烏玉兎と聞くは——此の赫々とした日輪の中には三脚の鴉が棲むと言ふげな、日中の道を照らす、老人が、暗い心の補助に、烏瓜の灯は天の與へと心得る、有難

い。」と掌を額に翳す。

婆さんは怪希な顔して、

「でも、狐火か何ぞのやうで、薄氣味が悪いやうでございませすね。」

「成程、……狐火、……それは耳より。ふん……斯ほどの森ぢや、狐も居らうかの。」

「えい、で、ございませすのでね、……居りますよ。」

「見たか。」

「前には、それは見たこともございませすとも。」

老人此を聞くと腰を入れて、

「あゝ、たのもしい。」

「ええ……」

と退つた、今の其の……たのもしい老人の聲の力に壓されたのである。

「さて、鳴くか。」

「へえ……」

「矢張り其の、」

と張腕に成つた呼吸を胸に、下腹を、づん、と据えると、

「クワーン！と言ふて？」

どさりと樹から下りた音。瓜がふらり、赤く宙に動いて、カラ／＼と森に響く。

婆さんの顔を見よ。

半纏着が飛んで歸つて、同じくきよとつく目を合せた。

「驚いた……鳥が一齊に飛びやあがつた。何だい、今の、あの聲は。」

いのに、何だか、から、樹の枝に、茸があつたもんだから。」

……鳥瓜を撈つたどけて下り／＼可

第 五

「これ、これ、いやさ、これ。」

「はあ、お呼びなされたは私の事て。」

と、羽織の紐を、兩手で結びながら答へたのは先刻の老人。一方青煉瓦の、それは女學校。片側波を打つた亞鉛塀に、ボヘミヤ人の珠數の如く、烏瓜を引掛けた、件の繩子張を凭せながら、疊んで懐中に入れて居た、其の羽織を引出して、今着直した處なのである。

また妙な處で御裝束。

雷神山の急昇りな坂を上つて、一畝り、町裏の路次の隅、凡そ礫川の工廠ぐらゐは空地を取つて、周圍はまだも廣からう。町も世界も離れたやうな、一廓の蒼空に、老人が所謂碌青色の鶯の舞ふ聖心女學院、西曆を算して紀元幾千年めかに相當する時、其の一部分が武藏野の丘に開いた新開の町の一部分に接觸するのは、唯此處ばかりかも知れぬ、外廓の其の煉瓦と、角邸の亞鉛塀とが向合つて、道の巾がぎしりと狭い。さて、其の青鶯も樹に留まつた體に、四階造の窓硝子の上から順々、日射に晃々と數へられて、仰くと避雷針が眞上に見える。

此の突當りの片隅が、學校の通用門で、其からもの、半町程、兩側の家邸。いづれに雑樹林や、畑を抱く。此の荒地の、せげら垣と向合つたのが、火藥庫の長々とした塀に成る。——人通りも何にも無い。地圖の上へ鉛筆で樂書したも同然な道である。

其處を——三光坂上の蘆蕘張を出た——此の老人はうら枯を摘んだ籠を唯一人で手に提げつゝ、曠野の路を辿るが如く、烏瓜のぼつちりと赤いのを、蝙蝠傘に搦めて支きつゝ、青い鶯を目的に、扇で目を避け、日和下駄を踏んで、大廻りに、先づ其の寂しい町へ入つて來たのであつた。

いや、火藥庫の暗い森を背中から離すと、邸構への寂しい町も、櫻の落葉に日が燃えて、梅の枝にほんの

りと薄綿の霧が薫る。百日紅の枯れながら、二つ三つ咲残つたのも、何となく思出の暑さを見せて、世はまたさして秋の末でも無さうに心強い。

其處を彼方此方、覗いたり、視たり、立留まつたり、考えたり、庭前、垣根、格子の中。

「はてな。」

屋の棟を仰いだり、後退りを又して見たり。

「確に……」

歩行出して、

「いや、待てよ……」

と首を窘めて、こそくと立退いたのは、日當りの可い出窓の前で。

「違つかの。」と獨言、變に、足音を忍ぶ形で、其のまゝ通過すると、女學校の其の通用門を正面に見た。

「此のあたり……あゝ碌青色の蔦ぢや、待て、待て念の爲よ。」

あの、輝くのは目ではないか、もし、それだと、一伸しに攪つて持つて行かれやう。金魚の木伊乃に似たるもの、狐の提灯、烏瓜を、更めて、蝙蝠傘の柄ぐるみ、丁と腕長に前へ突出し、

「迷ふまいぞ、迷ふな。」

と云ひく……(これ、これ、いやさ、これ……)爰に言答められて居る處は、いましがた一度通つたのである。

其處を通つて、兩方の塀の間を、鈍い稻妻形に畝つて、狭い四角から坂の上へ、によい、と皺面を出し

た……

坂下の下界の住人は驚いたらう。山の爺が雲から覗く。眼界濶然として目黒に豁け、大崎に伸び、伊皿子かけて一渡り麻布を望む。鳥は鷗が浮いたやう、遠近の森は晴れた島、目近き雷神の一本の大梅の、旗の如く、劔の如く聳えたのは、巨船天を摩す柱に似て、屋根の浪の風なさに、泡の沫か、白い小菊が、ちら／＼と日に輝く。白金の草は深けれども、君が住居と思へばよしや、玉の臺は富士である。

第六

「相違ない、此ぢや。」

あの怪しげな烏瓜を、坂の上の藪から提灯、逆上せるほどな日向に突出す、瘡せた頬の片笑窪は氣味が悪う。

其處で、坂を下りるのかと思ふと、違つた……老人は、すぐに身體ごと、ぐるりと下駄を返して、元の塀について又戻る……扱は先日、極暑の折に上つたと云ふ此の坂で、心當りを確めたものであらう。とする、狙をつけつゝ、こそ／＼と退いてござつた那の町中の出窓などが、老人の目的ではないか。裡に、眉のあとの美しい、色白なのが居やうも知れぬ。

それ、うそ／＼と又參つた……一度屈腰に成つて、静と火薬庫の方へ通抜けて、隣邸の冠木門を覗く梅ヶ枝の影に縋つて留まると、件の出窓に、鼻の下を伸ばして立つたが、眉をくしや／＼と目を瞑つて、首を振つて、とぼ／＼と引返して、然あらぬ垣越、百足紅の燃残りを、眞向に仰いで、日影を吸ふと、出損

なつた嚏をウツと吸つて、扇子の隙なく袖で壓へる。

其のまゝ、立直つて、徐々と、も一度戻つて、五段ばかり石を築いた小高い格子戸の前を行過ぎた、が溝はなしに柵を一小間、こゝに南天の實が赤く、根にさくらんの花が芬と薫るのにと並んで、其の出窓があつて、窓硝子の上へ眞白に塗つた鐵の格子、また色づかない、蔦の葉が棧に絶つて廂に這ふ。

思はず、其處へ、日向にのぼせた赤い顔の皴面で、鼻筋の通つたのを、まともに、伸かゝつて、ハタと着ける、と、颯と映るは眞紅の肱附。牡丹忽ち驚いて翻れば、花瓣から、はつと分れて、向ふへ飛んだは胡蝶のやうな白い顔、襟の淺黄の洩れたのも、空が映つて美しい。

老人轉倒せまい事か。——呀、緑青色の夥間に恥ぢよ。染殿の御谷を垣間見た、天狗が通力を失つて、羽の折れた鶏と成つて、都大路にふさくと羽博つた如く……慌しい遁げ方して、通用門から、どたりと廻る、と漸と其處で、吻と息。

丁ど其の時、通用門にひつたりと附着いて、後背むきに立つた男が二人居た。一人は、小倉の袴、絨の衣服、羽織を着ず。一人は霜降の背廣を着たのが、より向いて同じやうに、じろりと此方を見たばかり。道端の事、と敢て意にも留めない様子で、同じやうに爪ささを刻んで居ると、空の鴉が暗號でも爲たらしい一枚びらき馬蹄形の重い扉が、長閑な小春に、ズンと響くと、がら／＼ぎいと鎖が開いて、二人を、裡へ吸つて、ブーンと閉つた。

保険か何ぞの勧誘員が、紹介人と一處に來たらしい風采なのを、然も戀路でもあるやうに、老人感に堪へた顔色で、

「あゝ、うまゝと入つたわ……女の學校じやと云ふに、いや、此の構へは、宛然二の丸の御守殿とあるものを、然りとては美しい。ちやが、女に逢ふには服禮が利益かい。袴に、洋服よ。」

と氣が着いた……ものらしい……で、懷中へ頸で見當をつけながら、先づ其の古めかしい洋傘を向ふの亞鉛塀へ押つけやうとして、べたりと塗くつた樂書を読む。

「何ぢや——(八百半の料理はまづいゝ)はあ、可厭な事を云ふ……まるで私に面喰ちや。」
ふと眉を擧めた、口元が、きりりと締つて、次なるを、も一つ讀む。

「(小森屋の酒は上等。)ふん、あゝ好もしい。何ぢや、(但し半分は水。)……と、はてな……」
勘助のがんもどきは割にうまいぞ——むゝ割にうまいか、此は大沼勘六が事ぢや。」と云つた。
こゝに老人が呟いた、大沼勘六、其の名を聞け、彼は名取の狂言師、驚流當代の家元である。

第七

「料理が、まづうて、雁もどきがうまい、……と云ふか。人も違つて、藝にこそよれ、ちやが、成程まづいか、はゝつ。」

溜息を深うして、

「やゝまた、べらぼうとある……はあ、如何さま、此の(——)長いのが、べら棒と云ふものか。」

恰も、差置いた洋傘の柄につながつた、消炭で描いた棒を視めて、虚氣に、きよんとする處へ、坂の上なる小敷の前へ、きりりと舞つて出て、老人の姿を見ると、ドンと下りざまに大な破靴くるみ自轉車

をづるくと曳いて寄つたは、横びしやけて色の青い、猿眼の中小僧。

「やい！」と唐突に怒鳴着けた。

唯、ひよろりとする老人の鼻の先へ、泥を掴んだやうな握拳を、ぬつと出して、

「此ン爺い、汝だな、樂書をしやがるのは。八百半の料理がまづいとは何だ、やい。」

「これは早や思ひも寄りませぬ。が、何かの、此の八百半と云ふのは、お身の身内かの。」

「然うよ、まづい八百半の番頭だ、コン爺い。」

と評判の悪垂が、いひ状に、ひよいと齒を剝いて唾を吐くと、べとりと袖へ。これが熨斗目ともありやうな、柔和な人品穩かに、

「私は樂書はせぬけれど。まづいと云ふのを決して怒るな、これ、まづければ、私と親類ぢやてのう。」

「何だ、まづいのが親類だ——えと、畜生！」と云つた。が、老人の事でない。前生の仇が犬に成つて、

あとをつけて追つて來た、面の長い白斑で、矢庭に胴を地に摺つて、尻尾を巻いて吠えかゝる。

「畜生、叱……畜生。」と拳を揮廻はすが棄鞭で、把手にしがみついて、さすがの惡垂眞俯向けに成つて
邸町へ敗走に及ぶのを、班犬は波を打つて颯と追つた。

老人は、手拭で引摺つて袖を拭きつゝ、見送つて、

「……綠樹影沈んでは魚樹に上る景色あり、月海上に浮んでは兎も波を走るか、……いや、面白事はなす。」

で、羽織を出して着たのであつた。

頭窪に胡摩臘班で、赤にげに額の抜けた、面に、てらくと澤があつて、でつぷりと肥つた、が、小鼻の皺のだらりと深い。引捻れた唇の、五十餘りの大柄な漢が、酒焼の胸を露出に、べろりと兵子帯。琉球疑ひの羽織を被たが、引かけ状に出て来たが、羽織の其の襟が折れず、肩をたらしなく兩方を懐手で、ぎくり、と曲角から睨んで出た、これ、いやさ、これが、此なのである。

「何ぞ、老人に用の儀でも。」

と慇懃に會釋する。

赤顔は、でつぷりとした頬を張つて、

「いやさ、用とは此方から云ふ事ぢやらうが、うゝ、御老人。」と重く云ふ。

「貴方は？」

「いやさ、名を聞くなり其許からと云ふ處だが、何も面倒だ。俺は小室と云ふ、むゝ小室と云ふ、此の邊の家主なり、差配なりだ。其が何うしたと言ひたい。

ねえ、老人。

いやさ、貴公、貴公前刻から、此の町内を北から南へ行つたり来たり、のそく歩行いたり、窺つたり。何ぞ、用かと云ふのだ。な、其だに因つてだ。」

もの云ふ頬がだぶくとする。

「然れば……」

「いやさ、然ればぢや無からう。裏へ入れば、こまぐとした貸家もある、それはある。が、表の此の町

内は、俺が許と、あと二三軒、然も大々とした邸だ。一遍通り門札を見ても分る。いやさ、猫でも、犬でも分る。

一體、何家と捜す？ いやさ捜さずともだが、假にだ。いやさ、質くどう云ふ事はない、何で俺が門を窺ふた。唐突に窓を覗いたんだい。」

づゝと出て、

「扱は……」

「何が（扱は。）だろ。」

と噛んで居た小揚枝を、そッばう向いて、フツと地へ吐く。

第 八

老人は膝に扇子、恭く腰を屈め、

「此は御大人、お初に御意を得ます、……何とも何とも、御無禮の段は改めて御詫をします。扱て、つかん事を伺ひますが、扱て、貴方に、お一方、お娘御がおいでなさりはせまいか。」と、思込んだ状して言つた。

「娘……あゝ、女のかね。」

唐突に他の家の秘藏を聞くは、此奴怪しからずの口吻。半ば嘲けつて、はぐらかす、愈々真顔で、

「然れば、おあねえ様であらつしやります。」

「姉だか、妹だか、一人居ます。一人娘だよ。いやさ、大事な娘だよ。」

「は、つ、御道理千萬な儀で。」

「それが、何うしたと云ふんですえ。」と、餘り老人の慇懃さに、膨れた頬を手で壓へた。

「私、取つて六十七才、え、此の年ゆゑに、此の年なれば御免を蒙る。が、それにしても汗が出ます。」と額を拭つて、咳をした……

「何とぞいたして御大人、貴方の思召をもちまして、お娘御、おあねえ様に、でござる、一寸、御意を得ますわけには相成りませぬか。」

「ふん、娘にかい。」

「何とも。」

「變だねえ、娘に用があるなら俺に言へ、と云ふのだが、其は別だ。いや敢て性い御仁とも見受けはせんが、まあね、此の陽氣だから落着くが可うござす。一體、何の用なんだい。」

「いや、それに就いて罷出ました……無面目に、お家を窺ひ、御叱を蒙つたで、恐縮いたすにつけても、前後申後れましてござるが、老人は下谷御徒士町に借宅します、萩原與五郎と申して未熟な狂言師でござる。」と名告る。

「は、あ、茶番かね。」と言つた。

然り、茶番である。が、こゝに名告るは惜かりし。與五郎老人は、野雪と號して、鷲流名譽の者宿なの

である。

「あゝ、父上、こんな處に。」

「お町か、何だ。」

と赤顔の家主が云つた。

小春の雲の、あの青鴉も、此の人のために方角を替へよ。姿も風采も、鶴に似て、清楚と端正を兼備へた。襟の淺黄と、薄紅梅。臉もほんのりと日南の面影。

手にした帽子の中山高を、家主の袖に差寄せながら、

「帽子をお被んなさいまして、お母さんが。裏へ見廻りに行らしたかと思つたんです。」

唯、見迎へて一足退いて、亞鉛塀に背の附くまで、殆ど固く成つた與五郎は、忽ち得も言はれない嬉しげな、まぶしらしい、而して懐しさうな顔をして、

「や、や、や、貴女、貴女がやつた、貴女。」と袖を開き、胸を曳いて、縋りもつかひづ、然も押戴かひづ風情である。

疑と、驚きに、淺黄が細く、揺るゝが如く、父の家主の袖を覗いて、睜つた瞳は玲瓏として清い。

家主は、かたい奴を、誇らしげにスボンと被つて、腕組をつばりと爲ながら、

「何かい、……此の老人を、お町、お前知つとるか。」

「はう。」

と云ふのが含み聲、優しく爽に聞こえたが、些と覺束なさうな響が籠つた。

「あゝ、少時。一旦の御見、路傍の老耄です。令嬢、お見忘れは道理ぢや。もし、これ、此の夏、八月の下旬、彼は八ツ下り四時頃と覺えます。此の邸町、御宅の處で、迷ひに迷ひました路を尋ねて、お優しく御懇に、貴女にお導きを頂いた老耄でござるわよ。」

と家主の前も忘れたか、氣味の悪いほど莞爾々々する。

「の、令嬢」

「あゝ、存じて居ります。」

鶴は裙まで、素足の白さ、水のやうな青い端緒。

第九

「貴女は再時、お隣家か、其の先か、門に梅の樹の有る館の前に、彼家の乳母と見えました、丸髷に結ぶた婦の、嬰坊を抱いたと一所に、垣根に立つてござつて……」

と老人は手眞似して、

「ちやうじくあわゝ、と云ふてな、其の兒をあやして、お色の白い、手を敲いてあつてな。處へ、空車を曳かせて老人、車夫めに、何と、ぶつくと小言を云はれながら迷ふて參つた。

尋ねる家が、餘り知れないで、既に車夫にも見離されました。足を曳いて、雷神阪と承る、あれなる坂をば喘ぎましてな。

一旦、此の邊も搜したなれども、嘗て知れず。早や目もくらみ、心も弱果てました。處へ、煙硝庫の上

と思ふに、夕立模様ゆづりだちもようの雲は出ます。東西も辨わかへぬ此この荒野あらのとも存ぞんずる空そらに、また、あの怪鳥けちやうの鶺鴒とがの無氣味なきみさ。早はやや、既に立窻たちすくみにも成りませうづ處ところ——令嬢おあねさまお姿すがたを見掛みかけましたわ。

扱さて、地獄ぢごくで天女てんにょとも思おもひながら、年は取つても見みず知らぬ御婦人ごふじんには左右さゆうなうはものを申し憎にくい。なれども、いたいに兒こをあやしてござる、お優やさしさにつけ、づか／＼と立寄たよりまして、慮りよくない外いながら伺うかがひましたぢや。

が、御存ごぞんじない。いや此これは然さも然さう、深窓しんそうに姫御前ひめごぜんとあらうお人の、他所よその番地ばんぢをつが／＼お辨別わいわべのないは其そのの筈はずよ。

硫黄いわわが鳥しまの僧都そうづ一人、絶つがる纜じょう切きれまして、胸むねも苦くるしう成なりましたに、貴女あなた、再時そのとき、フトお思おもひつきなされまして、いやとよ、一段だんの事こととて、のう。

御妙齡ごせうりやうなが見得みえもなし。所帯しよたい崩くづしに、はらく／＼とお急いそぎなされ、それ、御家ごうちの格子かうしをすつと入はいつて、爾その時ときぢや——爾時そのとき覺おぼえました、あれなる出窓でまどぢや——

何なんと、其そのの出窓でまどの下したに……令嬢おあねさま、お机つくえなどござつて、傍かたへの本箱ほんばこ、お手文庫てぶんこの中なかなどより、お持出もちいでと存ぞんじられます。寺てら、社やしろに丹ぬを塗ぬり、番地ばんぢに數かずの字じを記かいた、此これが白金しろがねの地圖ちづでと、おふせて、老人らうじんの前まへで、お手に取とつて展ひらいて下くだされ、尋たづねます家を、あれか、此これかといや、此これの目めの疎うろいを思遣おもひやつて、御自分ごじぶんに御精魂ごせいこんな、須彌磐石ずみはんじやくのたとへに申まをす、芥子粒けしつぶほどな黒くろい字じを、爪紅つめべにの先さきにお拾ひろひ下くだされ、其そのの清きよらかな目めにお讀よみなさつて……其そのの……解わかりました時ときの嬉うれしさ。

御心の優やさしさ、御教ごきやうえの尊たうとさ、お知惠ちゐの見事みごとさ、お姿すがたの薦すすたい事こと。

二度目には雷神坂を、しや、雲に乗つて飛ぶやうに、車の上から、見廻しの景色を視ながら、口の裡に小唄謠ふて、高砂で下りました、はゝつ。」

と、蹲ひと、扇子を前半に帯にさして、兩手を膝へ、土下座も爲たさうに腰を折つて、

「して、其の時の御深切。老人心魂に徹しまして、寢食ともに忘れませぬ、千萬忝う存じまするぞ。」

「まあ、」
と娘は、また、きもしなかつた目を、まつげ深く衝と見伏せる。

此の狂人は、突飛ばされず、打てもせず、あしらひ兼ねた顔色で、家主は不承々に中山高の庇を、堅いから、こつん／＼こつんと弾く。

「解りました、何、其のくらゐな事を。いやさ、しかし、早い話が、お前さん、あゝ、何とか云つた、與五郎さんかね。其の狂言師のお前さんが、内の娘に三光町の地圖で道を教へて貰つたと慥う云ふのだ。」

「で、其の道を教へて下さつたに……就きまして、」

「まあさ、……いやさ、分つたよ。早い話が、其の禮を言ひに來たんだ禮を……何さ、それにも及ぶまいに、下谷御徒士町、遠方だ、御苦勞です。早い話が、わざ／＼あいでなすつたんで、茶でも進ぜたい、進ぜたい、が、早い話が、家内に取込みがある、妻が煩らうとる。」

「いや、まことに、それは……」

「まあさ、餘りお饒舌なさらんが可い。ね、だによつて、お構ひも申されぬ、で、お引取なさい、此で失禮せう。」

「あ、もし、扱、また。」

「何だ、又（扱。）扱、（又。）から。」

第十

與五郎は、早や懷手をぶり、と揺つて行かうとする、家主に、絶るが如く手を指して、

「扱、や、此は又お耳障り。いや就きまして……令嬢に折入つてお願ひの儀が有りまして、幾重にも御遠慮は申しながら、辛抱に堪兼ねて罷出ました。」

次第と申すは、餘の事、別儀でもござりませぬ。

老人、あの當時、……然れば後月、九月の上旬。上野邊の或舞臺に於て、初番に間狂言、那須の語。本役には釣狐のシテ、白藏主を致しまする筈。……で、此は、當流に於ても許しもの、易からぬ重い藝でありましての、われら同志に於ても、一代の間に指を折るほども相勤めませぬ。

近頃、お能の方は旭影、輝く勢。情なや残念な此の狂言は、役人も白日の星でござつて、やがて日も入り暗夜の始末。然るに思召しの深い方がござつて、一舞臺、われらの爲にも世話なさつて、別しては老人に其の釣狐仕れの御意です。仕るは狐の化、なれども日頃の鬱懷を開いて、思ふまゝに舞臺に立ちます、熊が穴を出ました意氣込、雲雀ではなけれども虹を取つて引く勢での……」

と口とは反對、情れた顔して、娘の方に目を遣つて、

「貴女に道を尋ねました、あの日も、實は、其のお肝入り下さるお邸へ、打合せ申したい事があつて罷

出る處でござつたよ。

時に、後月の其の舞臺は、一寸清書にいたし、方々の御内見に入れますので、世間晴れての勤めは、更めて來霜月の初旬、然る其の日本の舞臺に立つ筈でござる。が、劔も玉も下磨きこそ大事、やがては一拭ひかけまするだけの事。先月の勤めに一方ならず苦勞いたし、外を歩行くも、から脛を踏んでとぼつきます……と申すが、早や三十年近う過ぎました、老人が四十代、唯一度、芝の臺舞で、此の釣狐の一役を、其の時は家元、先代の名人がアトの獵人をば附合ふてくれた。其れなり中絶をして居ますに因つて、手馴れねば覺束ない、……此の與五郎が、さて覺束なうては、餘はいづれも若い人、まだ小兒でござる。折からにつけ忘れませぬは、亡き師匠、且は昔勤めました舞臺の可懷さに、あの日、其の邸の用も首尾すまいて、芝の公園に參つて、もみぢ山のあたりを徘徊いたし、何とも涙に暮れました。歸りがけに、大門前の蕎麥屋で一酌傾け、思ひの外の醉心に、フト思出しましたは、老人一人の姪がござる。

此が海軍の軍人に縁着いて、近頃相州の逗子に居ります。至つて心の優い婦人で、鮮い刺身を進ぜう、海を月を見に來い、と音信の度に云ふてくれます。此の時と、一段思着いて、遠くもござらぬ、新橋驛から乗りました、が、夏の夜は短うて、最早や十時。此の汽車は大船が乗換へてありましての、最も兩三度は存じて居ります、鎌倉、横須賀は、勤めにも參つた事です——

時に、乗込みましたのが、二等と云ふ縹色の濁つた天鵝絨仕立て、ブツと奥深い長い部屋で、何とやら陰氣での、人も澤山は見えませいで、此の方、乗りました勵には、早や新聞を顔に乘せて、長々と寝た人も見えました。

入口の片隅に、フト燈の暗い影に、背屈まつた和尚がござる！……鼠色の長頭巾、ト二尺ばかり頭を長う、肩にすんなりと垂を捌いて、墨染の法衣の袖を胸で捲いて、寂莫として蹲つた姿を見ました……
 何心もありませぬ。老人、其の前を通つて、グツとの片端、和尚どのと同じ側の向ふの隅で、腰を落しつけて、何か、のかぬ中の老和尚、死なば後前、冥途の路の松並木では、遠い處に、影も、顔も見合はらぶ、と振向いて見ますとの……」

娘は淺黄の清らかな襟を合はす。

父爺の家主は、棄てた揚技を惜しさうに、チョツ齒せゝりをしながら、あとを探して、時々吐睡く。

第十一

「早や遠い彼方に、右の和尚どの、形朦朧として、灰をば束ねたやうに見えました處、汽車が、ぐらくと揺れ出すにつけて、吹散つた體に成つて消えました、と申すが、怪しいでは決してござらぬ。居處が離れ陰氣な部屋の深い所爲で、また寂い暗い汽車でござつたので。

さて、品川も大森も、海も島もい月夜ぢや。さんざと鳴るわの、蘆の葉のよい女郎、口吟む心持、一段のうちに、風はそよくと吹く……老人、晝間息せいで、以ての外草臥れた處へ酔がとろりと出ました、寝るともなしに、うとくとしたと思へば、扱て早や、ぐつすと寝込むだて。

大船、ほふなと申す……驚破や乗越す、京へ上るわ、と、慌しう帯を直し、棚の包を引抱て、洋傘取るが据眼、さよろついで戸を出ました。月は晃々と露もある、停車場のたゝきを歩行くのが、人にをくれて

我一人……

ひとつ映りまする我が影を、や、これ狐にも成れ、と思ふ心に連立つて、あの、屋根のある階子を上る、中空に架けた高い空橋を渡り掛ける、とな、令嬢、さて、此處ぢや。

橋がりを、四五間がほど前へ立つて、コト／＼と行くのが、以前の和尚。瘦せに瘦せた干瓢、ひよろりとある、背丈の又高いのが、彼の墨染の法衣の裳を長く、しよび／＼とうしろに曳いて、前かゞみの、すぼけ肩、長頭巾を重げに、宛然影法師のやうに、ふわりふわりと見えます。

と云ふと弗と其處へ、語るものが口から吐いた、鐵拐の如き魍魎が土塀に映つた、……其は老人の影であつた。

「や、これはそも、老人の魂の投出した形かと思ふたです、——誰も居ませぬ、宙宇の橋でな。

然る處、前途の段をば、ぼく／＼と靴穿て上つて來た驛夫どのが一人あります。其が、此の方へ向つて、其の和尚と摺違ふた時ぢやが、の。」

與五郎は呼吸を吐いて、

「和尚が長い頭巾の頭を、木兎むくりと擡ると、片足を膝頭へ巻いて上げ、一本の脛を支かへ棒に、黒い尻をはつと振ると、組違へに、トンと廻つて、兩の拳を、はつたりと杖に支いて、

(横須賀行は此方かや。)

追掛けに、又一遍、片足を膝頭へ巻いて上げ、一本の脛を突支棒に、黒い尻をはつと擡ると、組違へに、トンと廻つて、

「横須賀行は此方かや。」

と、早や此方狀に參つた驛夫どのに、くるりと肩ぐるみに振向いた。二度見ました。瘦和尚の黄色か、つた青い長面。で、てらくと仇光る。姿こそ枯れたれ、石も點頭くばかり、行澄いた和尚と見えて、

童顔、鶴齡と世に申す、七十にも餘つたに、七八才と思ふ、軽いキヤ／＼とした小兒の聲。

で、又とぼ／＼と杖に紐ふて、向ふ下りに、此の姿か、階子段に隠れましたを、熟と視ると、老人思はず知らず、べたりと坐つた。

あれよく、古狐が、坊主に化けた白藏主。したり、あの凄さ、寂さ。我は化けんと思へども人は如何に見るやらむ。尻尾を案じた後姿、振り返り、見返る處の、科趣。八幡、此に極つた、と鬼神が教を給ふた存念。且つは又、老人が、工夫、辛勞、日頃の思が、影と成つて顯はれた、此でこそと、喃。」

與五郎、がつくりと胸を縮めて、

「あゝ、業は跨るまいものでござる。

舞臺の當日、流儀の晴業、一世の面目、近頃衰へた當流に唯一人、(古沼の星)と呼ばれて、白晝にも頭が光る、と人も言ひ、我も許した。此の野雪與五郎。装束澄まいて床几を離れ、揚幕を切つて！…出る！月の荒野に屹々として化法師の狐ひとつ、風を吹かして通ると思せ。いかなこと土間も棧敷も正面も、ワイ／＼がや／＼と云ふ…縁日同然。」

「立つて歩行く、雑談は殆まる、茶をくれい、と呼ぶもあれば、鰻飯と誂へたに此の辨當は違う、と喚く。下足の札をカチ／＼敲く。中には、前番のお能のロンギを、野聲を放つて習ふもござる。

が、あのれ見よ、與五郎、鬼神相傳の秘術を見せう、と思ふのが汽車の和尚ぢや。此の心を見物衆の重石に置いて、呼吸を練り、氣を鍛え、やがて、件の白藏主。

那須野ヶ原の古樹の株に腰を掛け、三國傳來の妖狐を放つて、殺生石の毒を沿せ、當番のワキ獵師、大沼善八を説伏して、さて、此處でこそと、横須賀行の和尚の姿を、それ、髻髷として、舞臺に顯はす……しや、習よ、藝よ、術よとて、胡麻の油で揚げすまいた鼠の蔑に狂ひかゝると、わつと云ふのが可笑さを囃すので、小兒は一同、聲を上げて哄と笑ふ。華旅の後室が抱いてござつた狛が吠えないばかりですわ。何と、それ狂言は、をかしいものには作したれども、此の釣狐に限つては、人に笑はるべきものでない。

凄う、寂しう、可恐しげは扱ないまでも、不氣味でなければなりません。何と！
とせき込んで言つたと思ふと、野雪老人は、がつくりと下駄を腰に支いて、路傍へ膝を立てた。

「然ればこそ、先、師匠をはじめ、前々に、故人が此の狂言をいたした時は、土間は野となり、一二の松は遠方の森と成り、橋かゝりは細流となり、見ぶつ男女は、草と成り、木の葉となり、石と成つて、舞臺唯充滿の古狐、最も奇特は、鼠の油の其よりも、狐のほひが芬といたいた……ものでござつて、上手が占めた鼓に劣らず、聲がタン／＼と響きました。

何事ぞ、此の未熟、蒙昧、愚痴、無知のから白痴、二十五座の狐を見ても、小兒たちは笑ひませぬに。

最早、生効も無いと存じながら、死んだ女房の遺言でも留められぬ河豚を食へても死ねませぬは、更に一度、來月はじめの舞臺が有つて、おのれ、此の度こそ、と思ふ、未練ばかりの故でござる。

寢食も忘れまして……氣落ちいたし、心萎え、身體は疲れ衰へながら、執着の一念ばかりは呪咀の弓に毒の矢を番へましても、目が暗んで、的が見えず、藝道の暗と成つて、老人、今は弱果てました。

時に蒼空の澄渡つた、

と心激しくみひらげば大なる暈、屹と仰ぎ、

「秋の雲、霽蕪と、あの鴉忽ち孔雀と成つて、其の翼に召したりとも思ふお姿、宛然夢枕にお立ちあるやうに思出しましたは、貴女、令嬢様、貴女の事ぢや。」

お町は謹て袖を合はせた。玉あたゝかき顔の優い眉の曇つたのは、其の黒髪の影響である。

「老人、唯今の心地を申さば、炎天に頭を曝し、可恐い雲を一方の空に視て、果てしもない、此の野原を、足を焦し、手を焼いて、徘徊ひ歩行くと同然でござる。時に道を教へて下された、あの、尊さ、嬉さ、おん可懷さを存ずるにつけて……夜汽車の和尙の、室をぐるりと廻つた姿も、同じ日の事なれば、令嬢の、袖口から、否、其の……あの、繪圖面の中から、拔出しましたものゝやうに思はれて成りませぬ。然やうに思へば、こゝに、繪圖面をお展き下されて、貴女と二人立つて見ましたは、凡そ天ヶ下の藝道の、秘密の卷もの、奥許しの折紙を、お授け下されたおもひ致す！

姫、神とも存ずる、令嬢。

分別に盡き、工夫に詰つて、情なくも教を頂く師には先立たれました老老。他に縫らうやうがない。

唯、偏に、令嬢様と思詰めて、とぼくと夢見たやうに参りました。

が、但し、土地の、あの圖に、何の秘密が有らうとは存じませぬ。貴女の、お胸、お心に、お袖の裡に何となく教が籠る、と心得ます。

何とぞ、貴女の、御身からいたいいて、人に囁され、小兒たちに笑はれませぬ、白藏主の法衣のこなし、古孤の尾の眞實の仕方を御教へに預りたい……」

「これ、これ、いやさ、これ。」

「少時！然りとてても、令嬢様、御年紀、またお髪の様子。」

娘は髪に手を當てた、が、容つくるとは見えず、袖口の微な紅、腕も端麗なものであつた。

「舞、手踊、振、所作のあたしなみは格別、當世西洋の學問をこそ遊ばせ、能樂の間の狂言のお心得あらうとは嘗て存ぜぬ。」

或は、何かの因縁で、斯道なにかしの名人のこぼれ種、不思議に咲いた花ならば、われらのためには曼陀羅華なれども、些と其は考え過ぎます。

それとも當時、新しいお學問の力を以てお導き下されうか。

然りとて瘦せたれども與五郎、科や、振は習ひませぬぞよ。師は心にある、目にある、胸にある……

近々とお姿を見、影を去つて、脆いて工夫がしたい！、折入つてお願ひは、相叶うことならば、お臺所の隅、お玄關の端に成りとも、一七日、二七日、お差置さを願ひたい。」

「本氣か、これ、あい。」と家主が怒鳴つた。

胸を打つて、

「血判でござる。成らずば、御門、溝石の上になりとも、老人、腰掛に辨當を持參いたす。平に、此の儀お聞濟が願いたす。」

口惜や、われら、上根ならば、此の、此なる烏爪一顆、こゝに一目、令嬢を見た丈けにて、秘事の悟も開けませうに、無念やな、老の眼の涙に曇るばかりにて、心の霧が晴れませぬ。

や、令嬢、お聞濟、悠の通りでござる。」

とて、開いた扇子に手を支いた。埃は颯と、名家の紋の橘の左右に散つた。

思はず、ハツと吐息して、羽織の袖を、齊く清く地に敷く、お町の小腕、無手と取つて、引立て、

「馬鹿、狂人だ、此奴あ。あい、そんな事を取上げた日には、これ、此の頃の書工に頼まれたら、大切な娘の衣服を脱いで、いやさ、素裸裸にして見せねば成らんわ。色情狂の、爺の癖に。」

第十三

「生蕎麥、もりかけ二錢とある……場末の町ぢやな。は、あ煮たて碗豆。古道具、古着の類。何ぢや、片假名を以てキメウニナオル丸、疝氣寸白虫根切、となつた……む、疝氣寸白は厭はぬが、愚鈍を根切りの薬はないか。」

こゝに、牛豚開店と見ゆる。見世ものではない。こりや牛舗ぢや。が、店を開くはめでないぞ。ほう、按腹鍼療、蒲生鐵齋、蒲生鐵齋、はて達人ともある姓名ぢや、あ、羨しい。あ、琴曲教授。

や、此の町にいたいて、村雨松風の調べ。さて奥床い事のう。——べ、べ、べ、べッかッこ。」

と、ちよろりと舌を出して横舐をとしたのは、魚勘の小僧で、赤八い、と云ふが青い顔色、岡持を振ら下げたなりで道草を食散らす。

三光町の裏小路、ごま／＼とした中を、同じく場末の、麻布田島町へ續く、炭團を千した薪屋の路次で、下駄の齒入がコッ／＼と行るのを見ながら、二三人共同證に集つた、かみさん一人、これを聞いて、「何だい、其の言種は、活動寫眞のかい、あう。」

「違はあ。へッ、違ひますでござんやすだ。こりやね、雷神坂上の富士見の臺の差配のお嬢さんに惚れやあがつてね。」

「あ、あの別嬪さんの。」

「然うよ、でね、其奴が、よぼ／＼の爺でね。」

「あや、へう。」

「色情狂で、あまけに狐憑と來て居ら。毎日のやうに、差配の家の前をうろついて附纏ふんだ。昨日もね、門口の段に腰を掛けて居る處を、大な旦那が襟首を持つて引摺出した。お嬢さんが縋りついて留めてたがね。へッ被成もんだ、あの爺を庇ふ程なら、俺の頬邊くらゐ指で突いてくれるが可い、と其奴が癩に障つたからよ。自轉車を下りて見て居たんだが、爺の背中へ、足蹴に砂を打つかけて遁げて來たんだ。

それ、そりや昨日の事だがね。申戯ちやねえや。お嬢さんを張りに来るのに辨當を持つてやあがる、握飯の。」

「成程、變だ。……齒入屋が言つた。」

「然うよ、其奴を、且が踏潰して怒つてると、そら、俺を追掛けやがる班犬が、ばく／＼食やがつた、をかしかつた、それが昨日さ。」

「分つたよ。昨日は。」

「其の前もね、毎日だ。何處かで見掛ける。いつも雷神坂を下りて、此の町内を、とぼくさく。其の癖のん氣よ。角の蕎麥屋から一軒一軒、きよろりと見ちや、毎日おなじやうな獨言を言はあ。」

「其奴が、(もりかけ二錢とある)だな、生意氣だな、狂人の癖にしゃあがつて、(場末だ)なんて吐しやがつて。」と齒入屋が、おはむきの世辭を云つて、女房徒をじろりと見る奴。

「それからキメウニナホル丸、牛豚開店までやりやがつて、按摩ン許が蒲生鐵齋、たつじんだ、土瓶だとも、薬罐めえ、笑かしやがら。何か悪戯をして遣らうと思つて、うしろへ附ちやあ歩行くから大概口上を覺えたぜ。今もね、其處へ來たんぜ。」

「來るえ。」と、一所に云ふ。

「見ねえ、一番、尻尾を出させる考えを着けたから、駈抜けて先へ來たんだ。——そら、そら、來たい、あの爺だ——ね。」

唯、琴曲の看版を見て、例の如く、帽子も被らず、洋傘を着いて、据腰に與五郎老人、うか／＼と通りかゝる。

「あれ！何をする。」

と言ふ間も無かつた。……おしめも禪も一所に掛けた、露地の物干棹を引ばずすと、途端の興五郎の裾を狙つて、青小僧、踏出す足と支く足の真中へスツと差した、はづみにかゝつて、あはれ興五郎、でんぐりかへしを打つた時、

「や、と倒れながら、激しい矢聲を、掛けるが響くと、宙で撓めて、とんぼを切つて、ひらりと翻つた。古今の手錬、透かさぬ早業、頭を倒に、地には着かぬ、が、無様な老體、踰跟と成つて倒れる背を、側の向ふの電信柱に撞とつける、と摺抜けに支えも敢へず、ぼつたら焼の鍋を敷いた、駄菓子屋の小店の前なる、椽臺に撞と落つ。

走り寄つたは婦ども。ばら／＼と來たのは小兒で。

驚の森の稻荷の前から、唯、見て、手に藥瓶の紫を提げた、美しい若い娘が、袖の縞を亂して驅寄る。

「怪我は。」

「吉祥院前の接骨醫へ早く……」

「お怪我は？」

興五郎野雪老人は、品ある顔をけろりとして、

「やあ、小兒たち、笑はぬか、笑へ、あは、と笑へ。爺が釣狐の舞臺もの、此處へ運べば樂なものぢや

——我は化けたと思へども、人は如何に見るやらむ。」

と半眼に、從容として口誦して、

「あれ、あの意氣が大事ぢやよ。」

と、頭を垂れて、ハツと云つて、俯向く背を、人目も恥ぢず、衝と抱いて、半巾も取りあへず、袖にはらくくと落涙したのは、世にも端麗なお町である。

「お手を取ります、お爺様、さ、私と一所に。」

第十四

圓に桔梗の紋を染めた、殿めしい馬乗提灯が、暗夜にほのかに浮くと、此を捧げた手は、灯よりも白く黒髪が艶々と映つて、ほんのりと明い顔は、お町である。

唯、眉に翳すやうにして、雪の頸を、や、打傾けて優しく見込む。提灯の前にすくくと並んだのは、順に數の重なつた朱塗の鳥居で、優しい姿を迎へたれば、恰も紅の色を染めた錦木の風情である。

一方は灰汁のやうな亂塔場、他は漆の如き崖である。

富士見の臺なる、屹屹尼天の廣前で、いまお町が立つた背後に、

此の一廓、富士見稻荷鎮守の地につき、家々の畜犬堅く無用たるべきもの也。地主。

と記した制札が見えやう。それからは家續さで、丁度お町の、あの家の背後に當る。が、其の間に寺院の其の墓地がある。突切れば近いが、避けて來れば雷神坂の上まで、土塀を一廻りして、數疊の前を抜ける事になる。

お町は片手に、盆の上に白い切を掛けたのを、しなやかな羽織の袖に捧げて居た。暗い中に、向ふに、最う一つ茫乎と白いののは涎掛で、其の中から目の釣つた、尖つた眞蒼な顔の見えるのは、靑石の御前立、

此の狐が晝も凄い。

見込んで提灯が低く成つて、裙が鳥居を潜ると、一體、聖心女學院の生徒で、晝は袴を穿く深い裙も——風情は萩の花で、鳥居もとに彼方、此方、露ながら明く映つて、友染を捌くのが、内端な中に媚かしい。狐の顔が明先にスツと來て近くて、其の背後へ、眞黒な格子が出て、下の石段に蹲つた法然あたまは與五郎である。

老人は、石の壇に、用意の毛布を引束ねて敷いて、寂莫として腰を据えつゝ、兩手を膝に端坐した。

「お爺様。」

と云ふ、提灯の柄が賽銭箱について、件の青狐の像と、しなつた背中合せに、お町は老人の右へ行く。

「やあ、」

以つての外元氣の可い聲を掛けたが、それまで目を瞑つて居たらしい、夢から覺めた面色で、

「又してもお見舞……令嬢、早や、それでは痛入る。——老人にお教へ下さると云ふではなけれど、繪

圖面が事の起因ゆゑに土地に縁があらうと思へば、もしや、此の明神に念願を掛けたらば——と貴女がお

心着け下された。暗夜に燈火、大知識のお言ぢや。

何か、故と仔細らしく、夜中に此へ出ませいでもの事なれども、朝、晝、晩、日のあるうちは、令嬢のお目に留まつて、易からぬお心遣ひ、お見舞を受けます。且は親御様の前、別して御尊父に忍んで遊ばす姫御前の御身に對し、別事あつて成らぬと存じ、御遠慮を申すによつて、故と夜陰を選んで參りますものを、何として此の暗い。此では老人、身の置さどころを覺えませぬ。第一唯今も申す親御様に、」

「否、母は、よく初手からの事を存じて居ります。煩らつて居りませんと、もつと以前に何うにもしたいのでございます。眞個にお爺様、貴老の御辛勞をお察し申して、母は蔭ながら泣いて居ります。」

「あゝ、勿體至極もござらん。其の儀も豫てうけたまはり、老人心魂に徹して居ります。」

「私も一所に泣くんですわ。眞個に私の身體で出来ます事でしたら、何うにもしてあげ申したいんでございますよ。それこそね、あの、貴老が遊ばす、お狂言の毘にかゝる爲に、私の身體を油でいためてども差上たいくらゐに思ふんですが……それはお察しなさいませよ。」

「言語同断。」と與五郎は石段をづるりと上つた。

第十五

「そして、別にお觸りはございませんの。おとしよりが、こんなに、まあ、御苦勞を遊ばして。」

「いや、老人、胸が、むづ痒ふて、たゞ身體の震へます外、爰に參つてからは又格別一段の元氣ぢや、身體は決してお案じ下されう事はない。却つて何かの悟を得やうと心嬉しいばかりでござる。が、御母堂様は。」

「母はね、お爺様、寝ました切、食が細つて困るんです。」

「南無三寶。」

「今夜は、些と更けましてから、それでも蕎麥かきをして食べて見やう、と然う言ひましてね、丁度父の在所から届きました新蕎麥の粉がありましたものですから、私が枕許で拵へました。父は、あの一晩泊りに

其の在へ參つて留主なのです。母と又、お爺様、貴老の事を然う申して……屹とお社においでなさるに違ひない、内へお迎へをしたいんですけれど、あゝ云つた父の手前、留主では猶更不可ません。」

「あゝ、如何にも。」

「蕎麥かきは暖ると申します。差上げたらば、と母と二人で然う申しましてね、あの、こゝへ持つて參りました。あかはりを添へてございますわ、お可厭でなくば召食つて下さいましな。」

「や、蕎麥搔を……然れば匂ふ。來世は雁て生れうとも、新蕎麥と河豚は老人、生命に掛けて好きでござる。そればかりは決して御辭儀申さぬぞ。林間に酒こそ暖めませぬが、大宮人の風流。」

と露店でも開くが如く、與五郎一廻りして毛布を擴げて、石段の前の敷石に、しゃんと坐る、と居直つた聲が曇つた。

また魅せられたやうな、お町も、其の端へ腰を下ろして、世帯ぶつた手捌きで、白いを取つたは拭布である。

與五郎、盆を前に兩手を置き、

「あゝ、今夜唯今、與五郎藝人の身の冥伽を覺えました。……就ては、新蕎麥の御祝儀に、爺が貴女に御

伽を話す。……われら覺へました狂言の中に、鬼瓦と申すがあつての、至極初心なものなれども、此がな

かゝの習事ぢや。——先づ都へ上つて年を経て、やがて國許へ立歸る侍が、大路の棟の鬼瓦を視めて、故

郷に残いて、月日を過ぎいた、女房の顔を思出て、絶えて久しい可懷さに、あの鬼瓦が其の顔に瓜二つち

やと申しての、聲を放つて泣くと云ふ——人は何とも思はねども、學問遊ばし惻發な貴女ぢや、言はいでも

分りませう。繪なり、像なり、天女、美女、よしや傾城の肖顔にせい。美しい容色が肖たと云ふて、涙を流すならば仔細ない。誰も泣きます。鬼瓦ながらでは、ソツとも、嘘にも泣かせぬ。

泣け！泣かぬか！泣け、と云ふて、先師匠が、老人を、月夜七晩、兩戸の外に夜あかしに立たせまして、其の家の、棟の瓦を睨ませて、動くこともさせませなんだ。

十六夜の夜半でござつた。師匠の御新造の思召として、師匠の娘御が、ソツト忍んで、蕎麥、蕎麥かき

を……
と言が途絶え、膝に、しかと拳を當て、

「袖にかくして持つてござつた。其を柿の樹の大な葉の桐のやうな影で食へました。鬼瓦ではなけれども其の時に涙を流いて、やがて、立つて、月を見れば、棟を見れば、鬼瓦を見れば、ほろ／＼と泣けました。

さて、其の娘が縁あつて。われら宿の妻に罷成る、老人三十二歳の時。——彼は一昨年果てました。老の身の杖柱、やがては家の藝の唯一人の話對手、舞臺で分別に及ばぬ時は、師の記念とも存じ、心腹を語つたに——いまは惜からぬ生命と思ひ、世に亡い女房が遺言で、留めい、と申す河豚を食へても、また死ねませぬは因果でござるよ。

今度の釣狐も、首尾よく化澄まし、師匠の外聞、女房の追善とも思詰めたに、式の如き恥辱を取る。

扱て、申すまじき事なれども、先達つて計らずもをがみました、貴女のお姿、お顔たちが、扱て／＼申すまじき事なれども、過去りました、あの、そのものに、いや／＼貴女、令嬢、貴女とは申すまい、親御ではす母君が。いや／＼……恐多い申すまい。……此の蕎麥搔が、よう似ました。

「やあ、雁が鳴きます。」

「あゝ、……雁が鳴く。」

與五郎は、肩をせめて、胸をわなしかして、はら／＼と落涙した。

「お爺様、さ、そして、懷爐をお入れなさいまし、懷中に私が暖めて參りました。母も胸へ着ましたよ。」

「えゝ！」と思はず、皴手をかけたは、眞綿のやうなお町の手、

「親御様へお心遣ひ……剩へ外道のやうな老人へ御氣扱、前お見上げ申したより、玉を削つて、お顔にやつれが見えます、のう……此は何をお泣きなされる。」

「胸がせまつて、唯胸がせまつて——お爺様、貴老があいとしうて成りませぬ。確乎抱いて上げたいわねえ。」と夜半にや苔む、此の一輪の赤い花、露を傷んで萎れたのである。

人は知るまい、世に不思議な、此の二人の、毛布に袴と寄添つたを、あの、青い石の狐が、顔をぐるりと向けて、鼻で覗いた……

「此は……」

老人は懷爐を取つて頂く時、お町が襟を開くのに搦んで落ちた、折本らしいものを見た。

「……町は基督教の學校へ行くんですが、お導き申したと云ふお社だし、はじめが此の繪圖から起つたの

ですから、此をしるしにお納め申して、同じに願掛をしてお上げないと、あの母が然う申します。私

も其の心で、今夜持つて参りましたよ。」

與五郎野雪、これを聞く、と拳を握つて、舞の構へに、正しく屹と膝を立て、

「ひ、いや、かさねぐ……たとひキリシタンバレンとは云へ、お宗旨までは尋常事ではない。此の

事、其の事。新蕎麥に月は射さぬが、暗は、ものぢや、冥途の女房に逢ふ思、此の燈火は貴女の導き。や

あ、繪圖面をお展さ下され、老人思ふ所存が出来た！」

と熟と睜つた、日の牙は、勇士が劔を撓むるが如く、袖を抱いてすつくと立つ。姿を絞つて、じりく

と、繪圖の面に——捻向く血相、暗い影が颯と射して、綿を描いた紙の上を、フツと抜け出した足が宙へ。

「クワーン。」と一喝、百にもあまる朱の鳥居を一飛びにスーッと抜ける、と影は燈に、空を飛んで、梢を

傳ふ姿が消える、と笈か、非ずや、雷神坂の途半ばのあたりに、暗を裂く聲

「クワーン。」と響いた。

「あれえ。」

「否、怪いものではありません。」

「老人の夥間ですよ。」

社の裏を連立つて、眉目俊秀な青年二人、姿も對に、暗中から出たのであつた。

「では、矢張りお狂言の？……」

「否、能樂の方です、——大師匠方に内弟子の私たち。」

「老人の、あの苦心に見倣へ、と先生の命令で出向いて居ます。」

と、齊しく深くした帽子を脱いで、お町に禮して、見た顔の、蠟燭の灯に二人とも臉が露に濡れて居た。
「若先生。」

「お、大沼さん。」

「貴方もかい。」

大沼善八は、靴を穿いた、裾からげて、正宗の四合壇を紐からげてして提げて居た。

「對手が、あの意氣込ぢやあ、安閑として居られません。寒い！(がた／＼と震へて、)いつでもお爺さんに河豚鍋のおつさあひで嘲笑はれる腹愈せに、内所で、お、寒いにちび／＼敵を取らうと思つたが、恐入つて飲めんのでした。——お嬢さん、貴女は、氏神でおいでなさる。」

(巻)